

6 やしきやまこふんしゅつどせきかん 屋敷山古墳出土石棺 1基 [有形文化財（考古資料）]

[所在地] 葛城市忍海 250 番地 1 葛城市歴史博物館

[所有者] 葛城市

[出土地] 葛城市新庄字屋敷山 287 番地 3 ほか

[時代] 古墳時代中期

[概要]

屋敷山古墳は、葛城山東麓の葛城市新庄に所在し、前方部を北に向ける前方後円墳で、規模は現状で全長約 135m である。前方部端西側に南北約 25m、東西約 12m の張出部があり、周濠を伴う。出土埴輪から 5 世紀中葉頃の築造と考えられ、1972 年 3 月 25 日に国史跡に指定されている。

古墳の主体部は竪穴式石室と考えられる。石室天井石は兵庫県高砂産の流紋岩質溶結凝灰岩（竜山石）で、長さ 3.43m、幅 1.18m、厚さ 0.29m である。

本石棺は長持形石棺と呼称される形式で、1972 年の発掘調査によって、後円部北側の墳丘上において蓋石が出土した。残存長 215cm（復元長 240cm）、幅 102cm、高さ 56cm である。長辺の両側に各 2 個、計 4 個の縄掛突起が付く。蓋石には部分的ながら赤色顔料が認められ、かつては全面に塗布されていたと考えられる。

後円部で露出しているのが発見された小口石は、その後地元の新庄中学校に保管されていた。遺存状況が良く、残存高 92.5cm（復元高 95cm）、幅 87.5cm である。もう 1 石の小口石は下半部を大きく欠く。これは屋敷山古墳の公園整備工事中に後円部東裾で発見された。2 石の小口石の外面には、中央やや上寄りに長方形の突起が付く。蓋石を受ける上辺は弧を描く。長側石と底石は確認されていない。

蓋石の出土場所と小口石の発見場所はいずれも後円部であり、相互の組み合わせに問題がないことから、屋敷山古墳後円部の竪穴式石室に納められた一基の長持形石棺の部材と考えられる。いずれの石材も石室天井石と同じ竜山石である。

長持形石棺は 4 世紀末以降のおよそ 100 年間にわたり製作、使用された。その編年研究によると、本石棺の年代は、縄掛突起が長辺のみに付くこと、天井部外面に文様がないこと、小口石外面に方形の突起が付くことから、5 世紀中葉に比定できる。

葛城地域では、5 世紀初頭から中葉にかけて、首長墓と目される室宮山古墳、火振山古墳、掖上罐子塚古墳、屋敷山古墳の 4 基の大規模古墳が継続的に築造されている。このなかで室宮山古墳と屋敷山古墳には、どちらの主体部にも長持形石棺が採用されている。長持形石棺は、畿内地域を中心に限られた地域首長の棺として使用され、「王者の棺」とも称されるものである。

以上のことから、本石棺は当時の葛城地域に傑出した勢力が存在し続けたことを証する考古資料として、とりわけ重要である。

